

伊豆箱根の本地の形成  
——東アジアの類話からの展望——

The Formation of Izu Hakone Honji  
in the perspective of similar East Asian tales

小島 璽 禮\*

Although narratives often appear to undergo free transformations, in fact they function as a totality with a determinate structure. The structural analysis of narratives seeks to uncover a general and inclusive structure, but at the same time must deal with the question of how, on the basis of that structure, a given narrative operates as a regular transformative system. In the case of the narrative of *Izu Hakone Honji*, textual variants show numerous discrepant motifs, and each of these motifs can be found in other narratives of the same genre. That despite such discrepancies the narrative maintains its identity is the effect of an underlying common structure and the fact that the differences are a result of structurally determinate transformations. Such a narrative is not a free assembly of motifs. It exists, and functions historically, as a totality. For the comparative study of narrative, the examination of relations between similar tales considered as totalities in this sense is of the utmost importance.

---

\* KOJIMA, Yoshiyuki 琉球大学教授

There are narratives reported in East Asia which have the same structure as the *Izu Hakone Honji*, i.e. the narratives of sunlight and moonlight in the Tibetan and Mongolian “Tales of Strange Corpses” (Tibetan version “Ro dinos-grub-can-gyi gtam-rgynd” and Mongolian version “Siddhi-kür”) which draw upon an Indian source, “25 Stories of Corpse Demons” “Vetālapñcaviṃśatika”. These are very similar to the Japanese narrative “Sun and Moon Honji”. The Japanese folktale “Oginkogin” belongs to the series which includes the “Izu Hakone Honji”, but also has similarities to the tales of sunlight and moonlight as well as to Tibetan tales. Apparently the Japanese tales in this series are based on similar Tibetan and Mongolian tales. Indian tales “Vetālapñcaviṃśatika” are said to have been transmitted to Tibet before the 13th century. Similar tales appear in the Tun Huang materials (Stein no.4654, Pelliot no.2721 A.D.950). One must presume that the development of such tales played a role in the formation of Japanese “Honji” narratives.

一九五〇年代以来、物語の構造分析ないしは物語の記号学が、アメリカやフランスを中心にして、いちじるしく進展している。それはクロード・レヴィ＝ストロースの「神話の構造的研究」（一九五五年）や「アスディワルの武勲詩」（一九五八年）が発表される中で、一九五八年にウラジーミル・プロップの『昔話の形態学』が英語に翻訳紹介されたのがきっかけになっている。プロップのねらいは、それまでフィンランド学派などが昔話の比較研究の単位に用いていた類型（Type）が不完全なものであることを指摘し、それにかわるものとして類型の筋を構成している登場人物の行動を表わす動

詞を要素として抽出して昔話分析の単位にすることにあった。プロップによれば、ロシアの魔法昔話は、三十一の要素のさまざまな結合によって成り立っているという。プロップの方法をさらに押し進めたアラン・ダンダスは『北アメリカ・インディアンの昔話の形態学』で、インディアンの昔話は、さらに抽象化されたごく少数の要素（モチーフム）の組み合わせに還元できるとしている。

このような構造分析は、物語の本質的な形態を知る上では、きわめてたいせつな試みである。しかし、構造とは変換体系であって、このような、それぞれの一群の昔話の母構造的なものだけを求めることに意義があるわけではない。われわれの物語の語り継ぎとは、物語の諸要素を学び、語るたびにその要素を結合させているわけではない。むしろ、一つのまとまった形式を持った物語を聞き、それをまた他人に語るのである。ワルター・アンダーソンが『皇帝と僧院長』で論じたごとく、昔話には語り手にも聞き手にも一つの種類の認識があつて、むやみに変化するものではなかった。物語は一つの構造を備えた統一体である。類型とは歴史的に成熟した物語の構造の水準の一つである。物語が個性的な実在である以上、現実の物語の研究には、類型の水準での構造分析が重要な意味を持っている。

構造的にいえば、その個性を帯びて実在する類型の根底には、一段階だけ抽象化された母類型ともいふべき大類型がある。生物の分類学にならば、類型を種にたとえると、属に相当するような単位である。一つ一つの類型は、この大類型が個性化して固定したものである。ある物語の形成とは、その物語が大類型から、いかに独自の変成をとげるかである。通時的には、一般に同一類型とは見えない類型相互の歴史的結びつきを描くことになる。変成とは、鉱物学で、ある岩石の組織と鉱物組成が地殻内部の物理化学的条件に適合するように再構成されることで、そのようにして生成された岩石が変成岩である。個性的実在としての類型が別の個性を持った類型に固定することを、私は類型の変成と呼んでいる。口承文芸的な原理で形成展開している物語に

は、この方法の適用が可能なはずである。

日本では、中世に、昔話と構想を等しくする物語が、語り物として発達している。昔話の「お銀小銀」と共通する「伊豆箱根の本地」もその典型的な一例である。「継母が実子を跡取りにしたいとおもう」を主題にした継子譚の一つで、実子が継子に協力的であるところに特色がある。

「伊豆箱根の本地」の伝本は、古くは鎌倉時代の成立といわれる『箱根権現縁起絵巻』がある。それに次いで南北朝時代の『神道集』に「二所権現事」としてみえる。『神道集』はこの時代東国で行われた唱導文学の台本で、「伊豆箱根の本地」が俗講として語られていたよい証拠である。絵巻と『神道集』とは、物語の構想はほとんど同じだが、文章の表現は異っており、「伊豆箱根の本地」の本文が語り物として揺れ動いていた結果とおもわれる。『神道集』と同文的な「伊豆箱根の本地」の引用は『曾我物語』真名本にもあり、広く知られていたことがうかがわれる。

やや遅れて室町時代には、『曾我物語』彰考館本や方法寺本、幸若舞曲「小袖曾我」などに「伊豆箱根の本地」の要約がみえる。省略されたためか、『神道集』の後半部分に対応する要素が大部分欠けているが、現存する範囲でも二点ほど特徴的な違いがある。一つは、『神道集』では主人公の姉娘が継子で、妹娘は継母の実子になっているが、『曾我物語』などでは二人とも継子である。これは「伊豆箱根の本地」の系統の物語では、姉と妹が協力的であるところに特色があることとかわる問題で、物語の論理からいえば、妹も継子では姉をいじめる必然性が弱くなる。二次的な変化である可能性が大きい。第二点は表の J I 継子の苦難の挿話の島に捨てる趣向が、桑の木のうつぼ船で流すことに変っている。うつぼ船は物語の特徴的な要素である。延宝初年刊の『いづはこねの御本地』は上、中巻だけで下巻を欠くが、その構想は、この『曾我物語』の系統である二人の姉妹のほかに太子が登場し、物語の展開に重要な役割が与えられているが、歴史的には古浄瑠璃風の付け



加えであり、物語の論理からいえば、継子譚としては不必要な部分である。

江戸時代には奥浄瑠璃風の語り物の筆録とおもわれる異本が二種知られている。寛政期の成立かといわれる『箱根本地由来』と文政十年の『箱根御本地』である。両者は文章はまったく別個であるが、構想は他の異本とくらべてきわめてよく共通しており、同系統の異伝である。語り物がどのように変化するかを解明するための好例である。基本的には『神道集』などの系統に属し、姉は継子、妹は実子になっているが、J I はうつぼ船で流す形になっていて、『曾我物語』などとも近い。うつぼ船と関連して姥皮の挿話が現われているのが、この二本の大きな特色である。昔話の「お銀小銀」は概して『神道集』や『箱根本地由来』と共通しており、山梨県に伝わっていた福原長者の物語も、この種の語り物の名残りであろう。

「伊豆箱根の本地」が「お銀小銀」のような物語を素材にして構成された作品であることは、ほぼ疑いない。最近「お銀小銀」の類話の存在が中国大陸などから報告されているように、「伊豆箱根の本地」も、本質的には東アジアの類話の展開の中から生まれたとみるべきである。敦煌文書の『舜子変文』（『舜子変』『舜子至孝変文』九五〇年）もその類話である。東アジアの類話で注目されるのは、インドの『屍鬼二十五物語』の系統をひく『不思議な屍体の物語』のチベット語版とモンゴル語版である。この中にある日光と月光という二人の王子の物語は「伊豆箱根の本地」と構想が等しい「月日の本地」ときわめて近い。主人公が兄弟であることもその顕著な一例であるが、その兄弟の名が日光・月光（チベット語、nima  $\phi$ see, dawa  $\phi$ see. モンゴル語、naren gerel, saren gerel）とあって、「月日の本地」で兄が日天子、弟が月天子になるというのにみごとに一致している。物語の展開では、継母が継子いじめを始める部分に継母が仮病をつかう挿話が共通してある。「伊豆箱根の本地」ではただ父親が不在になるというだけで仮病のことはない。「月日の本地」では、仮病により父親の不在が生じる形になっていて、『不思議な屍体の物語』と「伊豆箱根の本地」の中間形態である。

		神道集	箱根本地由来	箱根本地	お銀小銀
A	父親と母親	①天竺斯羅奈国大臣源中侍伊統母御前	①中天竺原田国の佐原中侍光氏と后	①遠天竺青浦国の大門長者と妻	
B	申し子	②観音に	×	②あげじの観音に	×
C	子の誕生	③女子(常在御前)	②女子(常在御前)	③女子(夜長の姫)	②女子(お月)
D	母親の死	④女子五歳のとき	③女子三歳のとき	④女子二歳のとき	③
E	継母との再婚	⑤女子七歳のとき	④白竜將軍の娘光けい夫人	⑤	④
F	継母の子の誕生	⑥女子(靈鷲御前)	⑤女子(常住才)	⑥女子(三屋の姫)	⑤女子(お星)
G	父親の不在	⑦姉十六、妹九歳のとき都へ三年	⑥姉十八、妹十四歳のとき都へ	⑦姉十一、妹七歳のとき都へ九年九月	⑥
H	継母の殺意	⑧	⑦	⑧	⑦
I	継母の仮病	×	×	×	①犬の生肝
J	継子の苦難 1. 島に捨てる 2. うつぼ船で流す	⑨ 1. a. 島に捨てる b. 観音と母親の援助	⑧ 2. a. うつぼ船で流す b. 鬼の援助(蛇皮) c. 火たき女としての帰宅	⑪ 2. a. うつぼ船で流す b. 鬼の援助(蛇皮) c. 火たき女としての帰宅	⑩ 2. うつぼ船 1. 2. (姥女)
J II	1. 土牢に入れる 2. 切り殺す 3. 打ち殺す 4. 毒殺	⑩ 1. a. 土牢に入れる b. 妹の援助	⑨ 2. a. 切り殺す b. 観音の援助	⑩ 2. a. 切り殺す b. 観音の援助	⑧ 4. a. 毒殺 b. 妹の援助 ④
J III	1. 火の上を渡る 2. 釜の上の秋の橋 3. 釜の修理	×	⑩ 1. a. 火の上を渡る b. 妹の援助 c. 観音の援助	⑨ 2. 釜の上の秋の橋 観音の援助	⑨ a. 圧殺 b. 妹の援助 ④ 2.
J IV	1. 穴へ落とす 2. 水中へ沈める 3. 井戸掘り	⑪ 1. a. 穴へ落とす b. 妹の援護(道しるべ) c. 王子兄弟の援助 d. 母親の霊の援助	⑪ 2. 水中へ沈める b. 観音の援助	⑫ 2. a. 水中へ沈める b. 妹の援助 c. 滝の明神の援助	⑩ 1. a. 穴へ落とす b. 妹の援助
K	継子たちと王子たちの結婚	⑫姉は太郎王子妹は次郎王子	×	×	×
L	継子たちの旅	×	⑫姉妹	⑬姉妹	⑬姉妹は殿様にともなわれて行く ⑭(継子の栗拾い)
M	継子たちの宿	×	⑬相模国法楽寺三笠山の笹谷の庵	⑭大夫(あげじの観音と尼寺(滝の明神)の庵	⑭殿様の館
N	継子の死	×	⑭	⑮	⑪盲目
O	父親の帰宅	⑬	⑮	⑯	⑮
P	継子たちを探す旅	⑭出家	⑯出家	⑰出家	⑯出家
Q	継子たちの消息	⑮仏の告げ	⑰不動明王の告げ ⑱	⑲庵の主人の太夫	×
R	父親との再会	⑯	⑲	⑲	⑲
S	継子の蘇生	×	⑲伊勢、春日、熊野の神の方で	⑲太夫の薬で	⑲妹の涙で姉の目があく
T	父親のその後	⑰帰国 ⑲国越	⑲姉妹とともに	⑲姉妹、大夫夫妻とともに帰国	⑲父親と姉妹は館でくらす
U	継母のその後	⑱大蛇に ⑲父親を追ってくる	⑲大蛇に	⑲父親と姉妹は国越え ⑲大蛇に ⑲父親を追ってくる	×
V	継子たちの転生	⑲日本国大饗高麗寺へ。父親は箱根権現。次郎王子と妹は伊豆権現	⑲相模大山不動明王の告げ。姉は箱根権現。妹は伊豆権現。父親は、三島大明神	×	⑲父親、太陽、お月、月、お星、星 ⑲父親箱根権現、姉、大原明神、妹、三島明神
W	継母の転生	⑲追って来て、伊豆相模の土肥郷で石に	⑲箱根山で四天王に退治される	×	⑲継母、モグラ

注) ×はその要素が欠けている、空欄は要素はあるがコメントすべきことがない、□は○を付けるほど似て

曾我物語	いづはこねの御 本地	月日の本地	シッデイ・ キユル	チベット昔話	舜子変文
①天竺の王、后、夫人	①西天竺、行春の国、王、妃、夫人	①中天竺のりんこく長者、御前	①クンニアクニナン王、王の妻	①農夫、その妻	①賢夏、妻の業登
②仏に	②観音に	②千手観音に	×	×	×
③女子二人(姉、常盤女)	③男子二人(こくば太人、女子二人、い姫、姉)	③男子二人(兄ふわあ、弟、さんさう)	②男子(ナランゲルデ=日光)	②男子(弟)一人、女子(姉)一人がいる	②男子(舜子)
④やがて	④姉妹が五、三歳のとき	④兄弟が五、六歳のとき	③そのうち	③幼いとき	③
⑤后きうしやうくはん	⑤隣国の帝の娘、わうかう夫	⑤関白の大臣の娘	④	④三年後	④三年後
×	×	×	⑤男子(サランゲレル=月光)	⑤懐妊	⑤男子(象児)と女子の二人の連れ子
×	×〔6、太子のこと〕	⑨	×	×	⑥出稼ぎ三年
⑥	⑦太子の死骸を捨て、姉妹にたつ	⑥	⑥	⑥	⑦舜子に紅桃とりをさせる
⑦讒言、出下が姉妹を立て謀反を計画	×	⑧	⑦	⑦	⑨讒言をする
⑧2 a. 姉妹を桑の木の上つぼ船で流す b. 天の援助 c. 漁師の援助	⑧2 a. 姉妹をうつつぼ船でしほみつ島に渡す	⑩1 a. 島に捨ててる b. 観音と母親の霊の援助	×	×	×
×	×〔9、夫の供養〕 以下、欠-	⑦4 a. 毒殺 b. 観音の援助	×	×	⑩3 a. 打ち殺す b. 帝釈天の援助
×	×	×	×	×	⑪3 a. 鶴子の智慧
×	×	×	⑫2 a. 水中に沈める b. 王女の援助 c. 水神の援助	×	⑫3 a. 井戸掘り b. 帝釈天の援助 c. 妹の援助
×	×	×	⑬	×	⑭帝の二人の娘と結婚
⑨姉妹	×	×	⑧兄弟	⑧姉弟を山に捨てる(継子の粟拾い)	⑬舜子一人
×	×	×	⑪ラマの小屋	⑨老女のいる宮殿(老女は魔女で姉弟が退)	⑭歴山で田作り
×	×	×	⑨弟(実子)の死	×	⑮父親は盲目、母親は愚人、弟は白痴
×	×	⑪	×	⑩子どもの無事を祈り火をた	⑧
×	×	⑫	×	×	×
×	×	×	×	×	⑮父親たちの消息を商人に聞く
×	×	⑬	⑭	⑪	⑭
×	×	×	⑩	×	⑮父親の眼があき、継母も弟も立派になる
×	×	×	×	⑫金銀をもって帰宅	⑯舜子とともに痛る
×	×	⑭関白の大臣の命で継母と侍女は桑の木の上つぼ船できかいが島に流される	⑮恥じて死ぬ	⑬もらった物が大蛇になり死ぬ	⑰父親が殺そうとするが舜子とめる
⑩姉伊豆権現、妹箱根権現	×	⑮兄は、日天子、弟は月天子一族は星	×	⑭父親と二人の子は宮殿で暮らす	×
×	×	⑯継母はモグラ、侍女はミミス	×	×	×

いないが参考となるもの、⑦⑨等は別の類話中の要素。

現在知られている以外にも、いろいろな類話があったはずである。しかし、今日手にすることができる類話でいえば、日光と月光の物語のような形の類話から、「月日の本地」も「伊豆箱根の本地」も生まれたのではないかと考えられる。日光・月光と「伊豆箱根の本地」を較べると、J IVで継子を水に沈める挿話が共通し、L 継子たちの旅で、N 姉が死に、後に S 蘇生する部分も、日光と月光では、弟が同じ運命をたどる形で現われている。また『曾我物語』の要約で I 仮病のかわりに、継母の讒言があるのも注目される。こうした要素の比較では、絵巻と『神道集』が日光・月光からもっとも遠い関係にある。日光・月光の物語がどのようにして「伊豆箱根の本地」になったか、つまりは類型の変成の問題であるが、まだ十分な変成作用を見きわめていない。ただ『走湯山縁起』に見える伊豆山権現の氏人の起源の物語に、杉の大木に日の光と月の光があたって、男と女が生まれ、この日精と月精が結婚して氏人の元初になったとあるのは、日光・月光の話が「伊豆箱根の本地」になった宗教基盤をうかがわせているようである。

昔話の「お銀小銀」には姉妹の名をお月・お星とするものがある。岩手県や宮城県に多いが、中には、お月は月に、お星は星に、父親は太陽に、継母はモグラになったという伝えもある。これは「月日の本地」で兄は日天子、弟は月天子、父親などは星、継母はモグラ、その侍女はミミズになったというのと一致する。昔話には、登場人物のあつかい方では、「伊豆箱根の本地」よりも「月日の本地」に近い形の物語が行なわれていたことになる。昔話にも I 継母の仮病の挿話を持つものもあり、「お銀小銀」の類話をとおしてみると、「月日の本地」と「伊豆箱根の本地」は複雑に交錯していたことがうかがえる。もしこれが、「月日の本地」系統と「伊豆箱根の本地」系統との混淆でないとするれば、ますます「伊豆箱根の本地」は「月日の本地」のような形を経て形成された可能性が大きくなる。

日本には、『舜子変文』と一致する昔話がある。だいたい継子の井戸掘りの挿話を中心とし、岩手県や広島県にあるほか、琉球諸島に濃厚に分布して

いる。長くまとまった類話は少く、ごく限られた挿話からなる断片が多いが、それらのほとんどは『舜子変文』の枠の中に納まる。それは共時的な形態分析をもとに、通時的な系統分類をすると、『舜子変文』のような形態から、一部分が残存したものであると考えられる。しかも琉球諸島には、その主人公の継子をシュンまたはスンと伝えている例が広く分布している。奄美大島、喜界島、徳之島、沖永良部島、沖縄島にあり、石垣島ではタイシュンとっている。喜界島には弟のソウまで生きている。これは、琉球諸島の「継子の井戸掘り」の類話が、今日われわれが見ることのできる『舜子変文』とかなり近い語り物の名残りである証拠である。広島県の類話でシャインとっているのも、螢の光の故事で有名な車胤と混同したもので、もとは、シュンであったかもしれない。

敦煌文書の『舜子変』（前半部分）と『舜子至孝変文』（後半部分）は、ちょうど補い合って『孝子伝』に見るような一貫した舜子の物語を構成しているが、二つの伝本の継ぎ目に、継母が謀略をもって舜子が悪者であると父親におもわせる部分がある。継母が舜子に紅桃を取らせ、継母は自分で足をかんざして突いて、舜子がとげを刺すようにたくらんだというところである。この『舜子変』の本文を受けた形で、『舜子至孝変文』でも、同じ内容が見えているが、そこでは、継母が、私が若くて器量がよいので舜子は畜生の了見を起こしたと父親に告げている。入矢義高氏は、ここに、舜子が継母のけがを見るために、衣の裾をあげるような場面があったのではないかと推測されたが、沖縄県的那覇市や宮古島の類話には、たまたま継母が継母の体に触れる仕ぐさをしたのを、不貞をはたらこうとしたとしてとがめるといふ挿話があり、むしろ『舜子変文』の原型を推定させるものがある。

このように、昔話の類型の自己制御の力は想像以上に強いものである。日本の「継子の井戸掘り」は、おそらく『舜子変文』のような形で日本に伝来したものであろう。最近、翻刻紹介された『堯舜絵巻』も、舜の部分の物語は『史記』よりは『舜子変文』に近く、継子譚らしい形をとっている。『堯

『舜絵巻』にはいろいろな挿話が集約されていて、『舜子変文』に相当する部分もその一部にすぎないが、継子の苦難の挿話には井戸掘りだけがみえており、この部分は昔話の「継子の井戸掘り」の展開と密接な関係がありそうである。『舜子変文』の系統の物語は「伊豆箱根の本地」の系統の話とは独立して伝わっていたことになる。

『舜子変文』は、継子の苦難の挿話に大きな特色がある。倉の修理と井戸掘りである。舜の物語は、もともと古代中国の帝王伝説の一つで、その原典は『書経』虞書の舜典にあったとされている。『書経』に基づき、古書の中の舜の物語を集録したとおもわれる『史記』五帝本紀の舜の記事にも、この二つの趣向はすでに見えており、『書経』舜典の逸文かともいわれている『孟子』万章上の舜の物語にもある。倉の修理と井戸掘りは、きわめて古くから舜の物語の中核をなしていた要素である。『舜子変文』はそうした古い舜の物語の流れを汲んで形成されたことになる。舜の物語が「伊豆箱根の本地」のような「実子の跡取りに」の大類型に相当する形態をとるのは、今日知られている限りでは、『舜子変文』が最も古い。『史記』では苦難の挿話は、舜が堯の二人の娘と結婚した後のことである。史伝が後世、昔話の類型に組み直されたとも考えられる。しかし、『史記』が古来の舜の物語を歴史的にまとめている可能性をはさむと、『舜子変文』にもっと近い原資料があったことも十分推測できる。

『舜子変文』には「実子を跡取りに」の他の類話とくらべて、大きな相違点もある。(5)継母の子の象しょうなどが連れ子らしく描かれ、(6)父親は再婚後すぐに出稼ぎに行っているが、『史記』ではかえって、舜の生母が死ぬと父親は後妻をめとり、象が生まれている。これなどは『舜子変文』の新しい変化かもしれない。後半の⑩歴山での田作りや、⑪父親との再会の前後の筋立ても他の類話とは異なり、『史記』などの古伝と共通する部分もあって個性的であるが、構造的にはLMPQRに相当し、異質ではない。I 継母の仮病の挿話もあって、全体には、『不思議な屍体の物語』などのチベット、モンゴル

の類話や日本の「月日の本地」に近い。東アジア大陸部で十世紀中葉以前、こうした「実子を跡取りに」の大類型が形成されていたことになる。

こうした物語の形成、展開は、敦煌文書で知られる俗講文学の発達と密接な関係があることであろう。『賢愚経』は、敦煌の仏教説話の有力な取材源であった。「祇園因由記」「<sup>ぎ おんいんゆう き</sup>降魔変文」「<sup>ごう ま</sup>醜女縁起」などがその例である。その『賢愚経』がまた梁の僧祐の『賢愚経記』（『出三蔵記集』巻九）によると、<sup>う てん</sup>于闐（コートン）で胡語による講経の筆記をもとに四四五年に成ったとあり、チベット語訳やモンゴル語訳もあるという。『舜子変文』も『不思議な屍体の物語』も、東アジアの大きな俗講文学の歴史の流れの中から生まれ、やがて日本へも伝わったものと考えなければなるまい。それも俗講文学という文学活動の動きをともなってにちがいない。

#### 主要参考文献

- 竹内尚次「箱根権現縁起絵巻への一考」『箱根町誌』一卷 昭和四二年 角川書店
- 松本隆信「民間説話集の室町時代物語」『斯道文庫論集』七輯 昭和四四年 斯道文庫
- 松本隆信「『箱根本地由来』一付解説」『箱根町誌』二巻 昭和四六年 角川書店
- 松本隆信「中世における本地物の研究(二)」『斯道文庫論集』一一輯 昭和四九年 斯道文庫
- 金岡照光『敦煌の文学』昭和四六年 大蔵出版
- 入矢義高編『仏教文学』中国古典文学大系、六〇巻 昭和五〇年 平凡社
- 小島瓔禮「『シッディ・キュル』の形成と日本の中世物語の展開－「月日の本地」をめぐって－」『比較民俗学会報』六巻三号 昭和六〇年 比較民俗学会
- 小島瓔禮「昔話の意味の読解－昔話の類型の変成－」『説話の研究』一九八五年（近刊） 仁荷大学校出版部（韓国語）

#### 討議要旨

福田座長から表の記号についての質問とそれに対する発表者からの説明

(表の注記に示す)があった後、山下宏明氏から、

東アジアにまたがる広域の話を、しかも文字で書かれていないものまで取りあげられたのは大変参考となるが、その場合、源流に遡る方法論はどのようなものであろうか、またタイプ、エレメント、モチーフなどという用語はテクニカルタームとして内容がはっきり確立しているものか、さらに、要素に分解してどのような要素があるかということと同時に、それらの要素がどのように総合されるかということも重要ではないだろうか、と質問があり、

発表者から、比較の基準として、相互に似ているということで少しずつ違う話を次々に結んでゆくと、非常に違う話にまでも連なってしまって比較ができない。そこで、或る基本要素があって、それが合成されているのが物語りだと考えるのがプロップの考えである。しかし我々の手もとにあるのは基本要素ではなくてまとまった物語りなので、どれだけ似ていれば同じ基本要素から成る一つのものかと言えるのかということ、実際にはケースバイケースにしか決められない。しかし、これだけ似ていたら偶然とは思えないので一つのものであろうという判断がある。

原型に遡及する問題については文献学の異本の場合と同じ考え方をしなければならぬであろう。ただ異本の場合は表現のレベルで行うが、表現にバリエーションのある物語りでは筋立てについて、異本の場合の系統を遡るような考え方でやってゆくことになると思う。

テクニカルタームについて、たとえばタイプというのは、現実的な概念で、何をもってタイプとするかといえば弱点をもつが、しかし実際にそういう物語りがあり、タイプという形であらわれているということであり、したがってそのようなメルヒェンの最大公約数的なものといえよう。またエレメントというのは物語りを分析する基本単位でモチーフと一致するものもある。これらの用語はプロップが使っている概念である、と答えがあった。